

福田晃著

『神話の中世』 『神語り・昔語りの伝承世界』

大島建彦

戦後の日本社会の激動期を通じて、各地の口承文藝の調査研究を続けることによって、すでに『昔話の伝播』『中世語り物文藝』その系譜と展開―『神道集説話の成立』『南島説話の研究―日本昔話の原風景―』などの著作をまとめるとともに、また『日本昔話事典』『昔話研究資料叢書』『日本伝説大系』『講座日本の伝承文学』などの編纂にもたずさわってこられた著者が、平成八年度をもつて立命館大学の専任教授を退かれるにあたって、あらたに『伝承の「あるさと」を歩く』（おうふう刊）、『神話の中世』（三弥井書店刊）、『神語り・昔語りの伝承世界』（第一書房刊）の三冊を出されたことで、改めてその研究者としての旺盛な意欲に感動させられた。臣の神話的叙述『毘沙門の本地』の伝承、その中の『神話の中世』というものは、『中世語り物文藝―その系譜と展開―』『神道集説話の成立』などにひきつづいて、中世の本地物語の全編にわたって、これまで中世の本地語と取りくまれたもので、また『神語り・昔

語りの伝承世界』の方は、『昔話の伝播』『南島説話の研究―日本昔話の原風景―』などにひきつづいて、南島の民間説話と取りくまれたものであって、それぞれに個別の課題について論ぜられたものを集めているが、いずれも神話の伝承を含みこんだ、口承文藝の体系化をめざしておられるのは注目される。

『神話の中世』は本文二百九十三ページで、「中世神話論」「北野天神縁起」の発想」「天神縁起と天神伝説」「天神伝説のすべて」として、あらたに『伝承の「あるさと」を歩く』の信仰をめぐって―『神道集』『諏訪縁起』の方法―『秋山祭事』『五月会事』をめぐる。

それ以下の諸編では、『天神縁起』『諏訪縁起』『百合若大臣』『毘沙門の本地』などの具体例を取りあげ、その神話としての伝承の実態を追るものとめることによって、そのような中世の本地物語のたぐいは、もともと「その信仰の布教・唱導を目して『読み』『唱へる』ものであり、その神徳を期待して『聞き』『聴

に「中世神話」という術語によつてとらえなおされている。特に最初の「中世神話論」では、その「神話」の概念や範囲について、いちらうは「世界や人間や文化の起源を語り、そうすることによって今の世界のあり方を基礎づけ、人々には生き方のモデルを提示する聖なる物語」と認められながらも、ただ「宇宙の起源を語る神話」「人類の起源を語る神話」「文化の起源を語る神話」だけにとどまらないで、さらに「神々の生涯のできごとを語る神話」をも含めて考えられるのである。

そして、そういう意味の神話にあたる、中世の本地物語というのも、「神々の祭祀儀礼にかかわるシャーマニティックな司祭者・神懸りする巫覡の実修から発想され、彼らの幻想のなかで生成された」とのことと説かれて、陰陽師系統の巫覡団体の活動などにふれられていく。

南日本との対立など、地域上の分布の様相について論ぜられている。そこでは、そのような類型の分布が、その変遷の過程を示すものではなくて、それぞれの類型の地域性は、その生活風土の文化圏を示すものであることが強調されている。第五部の「沖縄説話の特質」では、まず「沖縄昔話と本土」と題してさまざまなかつて、それぞれの類型の地域性は、そ共通する話型、南北諸島に濃密に伝承する話型、日本における伝承の稀なる話型、かつて本土にも伝承された形式のある話型があげられており、実は沖縄の民間説話の特性は、他地域のそれとの複合を通じて認められると説かれるのである。つぎには「沖縄昔話の伝承」と題して、沖縄・宮古・八重山という地域文化圏に分かれた上で、沖縄昔話の伝承の実態について、呼称・叙述の形式、伝承の意識、伝承の機会、伝承者の諸項目を中心に説かれており、さらに沖縄昔話の話柄の特色にも及んでいる。おわりに「沖縄説話の語り手たち」と題して、中国の民間故事の伝承、日本本土の昔話の伝承とくらべながら、沖縄の民間説話の伝承について、その男性優位の状況が示されている。しかも、そこではまた中国の民間故事、日本本土の昔話、沖縄のチ

ティ・バナシ』というような枠組の設定が、男性優位とか女性優位とかいう状況の把握をもたらしたのではないかといふ、これからのお手本は、文藝の調査研究にとって、かなり重大な疑問が出されていることも注意しておきたい。

そういうわけで、『神話の中世』『神語り・昔語りの伝承世界』といふ、二つの書物の著者の関心は、きわめてひろい範囲にわたって

い。
ないところといわなければならない。民間の神話の体系化。昔話の地域性の意味づけなどについては、これから論議の余地も残されているが、いずれにしても、この二つの書物の所説をのりこえてゆくためには、やはり精細な実地の調査にもとづく、それぞれの伝承の実態の把握が求められるのは今までとな

『神話の中世』（一九九七年一月・三弥井書店・二五七円）
『神語り・昔語りの伝承世界』（一九九七年二月・第一書房・三九一四円）

(おおしまだてひこ／東洋大学)

書評

小林幸夫著

『咄・雑談の伝承世界—近世説話の成立—』

花部英雄

もの、聞くもの、食するものから、自由な連想になるくさぐさの言葉がたちあらわれてくる。称して「咄・雑談」の世界である。そこでは数奇雑談から卑俗な世間雑談、狂歌・艶笑、軽口・秀句など、雅俗さまざまの咄と言葉の誕生・再生産がくり広げられる。言葉

もの、聞くもの、食するものからの、自由な

連想はがなぐさくさの言葉がたせあらわれてくる。称して「咄・雑談」の世界である。そ

こでは数奇雜談から卑俗な世間雜談、狂歌・

艶笑、軽口・秀句など、雅俗さまざまの咄と
言葉の誕生・再生産が、つづかれ。言葉

言葉の誕生・再生産がくわしく語られる言葉